

佳作

『シラノ・ド・ベルジュラック』 ロスタン著；渡辺守章訳

(中央新書・文庫 光文社古典新訳文庫；KA 口 4・1)

情報コミュニケーション学部 3年 宮沢智紀

男なら泣くな。

誰も、幼い頃にそのように叱られた記憶はあるはずだ。泣き虫だった私はいつもそう父から聞かされた。私の愛するヒーロー、シラノを見ると私はこの言葉を思い出す。大人になったいまひしひしと感じるのだ。男なら——。彼はその言葉に向き合い続けている主人公であったと、心から思うのである。

鷲鼻の男シラノは剣客であり文豪、貴族相手に舌戦を仕掛けてまわり、独立不羈の象徴である羽飾りを常々自慢にしていた。彼の悩み事は一つ、その醜い姿故に愛するロクサーヌへ想いを告げられないでいることである。しかし、やがて彼は自分の恋を成就させる方法を見つける。二枚目であるものの、文才の無いクリスチャンの代わりに恋文を書くことだ。彼はこう提案する。「俺たちふたりで、恋物語の主人公になろう」と。

こんなことをしても、彼は自分が愛されないことなど最初から分かっていた。それでもそうせずにはいられなかったのだ。何故なら、そうすることが彼の幸せであったから。

しかし、クリスチャンは戦死する。このときからロクサーヌに恋焦がれたシラノは死に、クリスチャンとの約束を守るためだけのもう一人のシラノが生きていくことになる。

戦後、ロクサーヌの無聊を慰めるために週に一度彼女の下へ訪れていたシラノはやがて自らの死期を悟り、ロクサーヌが形見に持っていた手紙を読み上げる。自らの血と、涙がしみたその手紙を。彼にとって、最期に打ち明ける自らの本心であった。しかし、ロクサーヌは十四年前にシラノが語った愛の言葉を覚えていた。そしてついに自分が愛したあの言葉を綴ったのはシラノだということを悟るのだった。

死の直前、シラノは自分にだけ見える幽霊達に向かって、啖呵をきる。「さあ、取れ、取るがいい！ だがな、貴様たちがいくら騒いでも、あの世へ、俺が持っていくものが一つある。それはな、私の羽飾り(mon panache)だ」

この台詞を読んで、私は衝撃に胸が打ち震えた。死ぬ間際まで、シラノは自分が手紙の主であることを否定し続ける。言いたいことは言う、が信条であったシラノが唯一つ言えなかったこと。ロクサーヌへの恋心。本来なら墓場まで持っていくはずだったそれを、彼女に知られ、ついにシラノは彼女に感謝の言葉を投げかける。それが出来て初めて、彼は彼の羽飾りを持っていくことが許されたのではないだろうか。

男なら——。そう言われて叱られたことを今でも思い出す。しかし、男であり続けることは難しいのだ。それでも、愛する人の前で涙も流さず、男同士の約束に殉ずる男シラノを見て、私は真の男とはこういうものか、と感嘆を漏らし、彼の panache に勇気付けられるのだ。